

## Joyce Carol Oates の短篇小説

— *By the North Gate* に於ける主題と背景 —

依 岡 道 子

### Joyce Carol Oates's Short Stories

The Themes and Background in *By the North Gate*

MICHIKO YORIOKA

Joyce Carol Oates(1938—)は、現代アメリカ作家の中でもっとも多作の作家の一人である。1963年以来、短篇集、長篇小説ともに既に各々10冊以上出版し、その他詩集、戯曲、批評などあらゆる文学活動に精力的に挑戦している。ところが、彼女が多作であり、一般大衆の間で作品がよく読まれているということや、styleの面で無関心であると思われることが、流行作家とみなされ、専門家の研究が比較的少ない所以であろう。しかしオーツの批評家の一人であるJ. V. Creightonは“Oates is one of the most serious and intellectual of contemporary writers,....”<sup>1)</sup>と述べて、現代のアメリカ作家の中で、オーツの存在を高く評価している。

オーツの作品の中で短篇と長篇のどちらがより優れているかということは、彼女の作品の全てを読んだわけではないから筆者には判断できないが、批評家G. F. Wallerは“It is in the short stories perhaps that Oates's best work is to be found.... Many of the stories are certainly repetitive or trivial.”<sup>2)</sup>と論じている。確かに、オーツの短篇小説の中には、オーヘンリー賞を獲得したような優れた作品が多いが、反面、テーマの繰り返しなどによってつまらないと思われる作品もある。同氏は更に、“....it is with her novels that her reputation and importance must rest.”<sup>3)</sup>と述べて、彼女の文学を考えるにあたっては彼女を有名にした長篇小説の重要性を指摘している。

オーツの作品では、短篇と長篇が類似したテーマを扱っている場合が多く、いわば短篇が長篇の下地となっているように思われる。先に述べたように、確かに短篇の中には類似したテーマの繰り返しにより新鮮味が乏しいものもある。しかし概して、ストーリーの面ではかなり多様性を有し、読者を引きつける魅力を持っている。ストーリーが多様であっても、各々の作品には「テーマ的統一」(thematic unity)が見うけられる。

そこで研究の順序として、初期の作品から年代を追ってオーツの作風、オーツの中心的なテーマを追究すべきだと考え、今回は彼女の第1冊目である『北門のかたわらで』*By the North Gate* (1963)をとりあげ、そのthematic unityについて考察したい。

*By the North Gate*には、14篇の短篇が入っている。これらの作品は、どの作品も共通した雰囲気を持っているような印象を与える。それは作品のテーマ、場面と背景、登場人物、更にアイディアというような小説を構成する諸要素に於て、どの作品も何かの点で似ている要素を持っているからである。

特にその背景に関しては、この短篇集の中には、Eden Countyという架空の地を舞台とする作品が数篇ある。Eden Countyという地名ではなくても、殆んどどの作品はNew Yorkの西

の農村地帯が背景となっていると思われる。

オーツは17歳になるまで、New York 州の郊外 Millerport の近くの Erie County に住んでいた。短篇中の Eden County という地名は、いかにも象徴的な響きを持っているが、オーツ自身 “All art is autobiographical.”<sup>4)</sup> と言っているように、オーツにとってはそれは昔の思い出につながる emotional landscape になっている。Eden County が舞台となっている作品は、“The Census Taker”, “Ceremonies”, “An Encounter with the Blind”, “The Fine White Mist of Winter” であり、いずれも未だ都会の影響の及ばないはずの片田舎、あるいは奥深い田舎が舞台である。

これらの短篇では、“Some time ago in the Eden County,…” と〔おとぎ話風〕(in a fairy-tale cadence)<sup>5)</sup> に物語が始まっている。しかしここにあるのは、遠い昔の昔話でも神話でもない。“The Census Taker” の場合も “Some time ago in Eden County, in the remotefoothills of Oriskany, the census taker of that area—a quiet sleepy man in the thirty-eighth year of his life—came one day to the last of the houses he was to investigate.”<sup>6)</sup> と始まり、一見穏やかで何の変哲もない田舎の風景を想わせる。物語はこの地方の国勢調査員の話である。最後に訪れた家では父親が留守ということで、彼は父親の帰りを待つ。その家の母親、娘、息子の3人と話をする間に、彼はこの隔絶した山村に住む人々の予想しなかった現実を知る。

その娘は2年前の調査の後、“Half them people you got in that book are dead now or grown old or different.” (p. 34) と話す。この家の祖母は癌で苦しみながら死に、双子の子供は事故で死亡し、父親も家を出たまま帰って来ない事実を知り、彼は調査の意義を疑い始める。半ば気がふれていると見える娘の凝視に対し、彼は Eden County にやって来た時から心にかかっていた不安と恐怖を見抜かれたように驚く。彼は家族の人員を記入して書類を役所に提出すれば、それが現実となり、調査員としての義務を果たせるものだと思い、自分の気持を半ば冷笑的にはあるが、なぐさめていた。事故死や病死などは、彼とは何の関連もないことであった。彼は心の中で次のように考えていた。

But he had consoled himself with the thought that once he was back in town, once he had delivered the book to the proper authorities, the reality that the book suggested would become real, would have a greater reality than any arbitrary juxtaposition of human lives out here in the country. What did it matter that a man lived or died, that he had four children or five, except as it was recorded in the book? But he could not explain this to the girl, who stared boldly at him; She and those like her would never understand. (p. 35)

彼は調査をあきらめ帰宅しようとするが、母親は “But you ain’t goin’ to finish the census,” the woman said, “without us here—Why did you come? Why are you comin’ around to place?” (p. 39) と質問する。彼は “Do you expect me to give answers? Who am I to give you answers, to give you anything? Am I a man? Do I look like a man?” (p. 40) と逆に彼女に質問を投げ返す。この “Am I a man?” という彼の問いは、彼がこの家の娘に、調査の意味と “What are you?” とたずねられて答えられない自分に対して、投げかけた問いであると思う。彼は自分の仕事、そして生々しい現実を見過ぎて来た自分の人間性にも疑念を抱き始めたのであろう。彼はこの Eden County での “the mysteries of life”<sup>7)</sup> に直面して、彼のこれまでの人生に対する概念を根底から揺さぶられている。

Eden County という地名ではないが、同じような地域における同類のテーマを扱い、しか

も主人公が老人ということで共通しているのが“Swamps”と“By the North Gate”である。両者ともテーマが比較的解り易いということと、登場人物とその背景との関連が密接でリアルティーがあるという点で、オーツの短篇の中でも優れた作品であると思う。

“Swamps”の場合、主人公の老人は、息子夫婦の家のすぐ裏庭の小屋で、一人暮らしであり、孫の Billie がいつも彼のあとをついてまわり、物語はこの少年の視点から捉えられている。Billie の父親の方は、この奥深い田舎の生活に不満を抱き、人生に悲観的であるのに対し、老人は貧しくとも自分の生活を楽観的に見ている。彼にとってはここがエデンの園である。平和な老人の生活に、1つの出来事が起こる。一人の若い妊娠中の女がやって来て、老人の小屋で子供を産む。老人が彼女の出産の面倒をみてやったにもかかわらず、その女は老人に怪我をさせ、彼のわずかばかりのお金とナイフを奪って赤ん坊を残し、逃げ去る。老人はその後落胆した様子で息子夫婦と暮し、間もなく亡くなる。Billie は老人が “They robbed me.” (p. 27) と幾度も繰り返すのを聞き、何故祖父が ‘they’ と言ったのか不思議に思い、老人の死後もその言葉を思い出している。

‘they’ とは加害者の若い女のことを指すのではなく、Eden County の老人の平和な生活を脅かした老人には demons とも思える現代社会を指すのではないだろうか。そして老人が盗まれたものは、老人の Eden County における古き良き時代の生活と人々の暖かい心であった。子供の目に映った老人の生活は、素朴で明るいエデンの園の生活であった。しかし老人が若い女を連れて来た後、Billie が夜、寝つかれないまま寝室から老人の小屋を見た時の様子が次のように描かれている。

... he stared out the cracked window into the queer flat darkness that was the back yard. Beyond were the barn and chicken coop and the trees around them. Behind them, back a short distance, was his grandfather's house, but he could not see it; he could make out only a thick blot of darkness, and behind it more darkness, the darkness of the swamp, so black, so deep, that a person might go blind staring into it. In the darkness there was no difference between the old man's house and the swamp itself.... (p. 20)

少年が見た暗闇は、老人のみならず少年を取り巻く社会の環境を暗示するものであり、Eden County は最早老人にとってエデンの園ではなくなっていたことを物語っている。

一方“By the North Gate”の中の Revere 老人は、同居する家族もなく孤独な生活を送っている。彼は68年間の農地での労苦と家族の不幸な出来事により、先の老人とは異なった人生観を抱いている。他人をナイフで刺し殺した息子は行方不明で、妻は他界している。結婚した娘とその夫との同居を拒み、彼らは家族でありながら、全て strangers のように見える。“Revere felt a pang of guilt, as if he had betrayed Nancy, as he had betrayed his sons, by bringing them all into a world of strangers.” (p. 245) このように家族がお互いに strangers に思われる程にまで心の交流を失ったことに対し、父親としての責任を感じている。彼は広大な農地の中の荒れた家に一人暮らしであるが、ある日農場に放火され、更に愛犬が腹を刺されて死ぬという出来事が起こる。犯人は老人の家に遊びに来ていた少年達であることが解り、彼は少年達にむかって “Why did you do that?” (p. 250) と叫ぶ。しかし彼は自分の息子の violence による辛い経験があるため、最後には “They ain't anything but boys no more....” (p. 251) と述べ、あきらめと同情に似た気持を示し、事件の後、落胆し床についた先の老人とは対照的である。

Revere 老人のこの農場での人生は、雑草との闘いであった。その闘いに破れ、彼の家族を

失い、そして愛犬までもなくした現在、彼は現実を冷静に見つめることが出来る。彼の弱った目に少年達の姿が捉えられる。 “... he saw them enveloped by a greater darkness beyond them, the darkness of this wild land itself; he saw them caught with the accidental pattern of a fate in which he himself would be caught.” (p.251) 少年達は violence により老人に悲しみをもたらしたが、彼らも又 violence の支配する暗闇の世界に包みこまれている失樂園の住民なのである。

これらの作品では “Mindless evil is embodied in the form of young people: the pregnant girl, the vicious boys.”<sup>8)</sup> と言われるように、若い人々によって為される violence をテーマにした作品が、この短篇集には多い。

“Sweet Love Remembered” と “In the Old World” では、主人公は若者であり、それぞれ過去の何かの出来事のため、現在の生活に苦痛を感じている。“Sweet Love Remembered” 主人公 Amie はレストランで働くウェイトレスであるが、オーツの短篇の登場人物にしばしばみられるように、何かに心を奪われている若い娘である。例えば、レストランの窓の外を往来する人々の流れを見て、彼女は “a queer, chill sensation, sweet hurt...” (p.70) と心の痛みを感じている。具体的に彼女の過去に何があったかは書かれていないが、彼女の弟がかかわっていることが想像できる。作品では現在のウェイトレスとしての生活の中に、弟の思い出が挿入されている。それは弟 Jarley がある日、雨の中を脚に怪我をして血を流しながら帰って来る様子を彼女が家の中から不安げに眺めている風景である。

ウェイトレスとして騒々しい若者達の接待をする外面と、 “a sense of isolation and a knowledge that the world was false and painful, that perhaps she would always be alone with this knowledge, that she would never be able to share it with anyone.” (p.70) という内面とが対照的に描かれている。彼女は若い娘でありながら、若者達の行動に興味を持たず、ただ一人中年の男性と付き合っている。彼とデートをしている時、彼女の心の中には、 “...—the sadness, the surrender, that flattened world of some abandoned past and this present violation, corruption...” (pp.77—78) があり、忘れられない弟の姿— “the lost vision of her brother again...” (p.78) がある。彼女の内部にはいつも過去と現在が同居している。

“In the Old World” の主人公 Swan という若者は、他の作品の主人公達とは違って、自分の悪業を認めている。田舎から一人で町に徒歩でやって来て、その町の sheriff の office に入っていく。sheriff のところに来た理由は、最初ははっきりとは解らないが、彼の話の内容から、教会のピクニックで数名の黒人の子供との間で喧嘩が始まり、その中の一人を彼がナイフで怪我させたことが解る。偶然その時 sheriff の所に来ていた黒人の少年が目包帯をしていたことからその少年が刺された相手ではないかと想われる。Swan は自分の行為に対し、相手からの制裁を受けるつもりで、 “I mean to let him use it on me.” (p.195) と言ってナイフを差し出すが、deputy はそれを片付けさせる。Swan は黒人の少年の報復を受けることにより、自分の罪の償いを願ったのかもしれない。しかし犯した罪はとり返しのつかないものになり、その罪を彼は一生背負い続けることをこの短篇は物語っている。 “Swan cannot restore his own innocence and make his world pure and explicable. He remains a lonely and confused young man, enveloped by disquieting feelings and depressed by his inability to pull together his fragmentary insight.”<sup>9)</sup> という creighton の見解のように、彼は violence により最早無罪ではなくなった。彼の罪は彼の人生に不安感と洞察力の欠如をもたらし、彼の将来を

孤独なものにさせることを暗示している作品である。Swanはエデンの園を追放されたアダムの姿にはかならない。

“In the Old World”というタイトルもSwanと同様象徴的なものと思われる。かつて人々がヨーロッパからアメリカへNew Worldを求めてやって来たが、New Worldであったアメリカも、文化の発達と共に既にOld Worldになってしまい、暴力と悪に満ちたlost Edenであることを意味しているのであろう。

以上の2篇の短篇に関して共通して読者が抱くと思われる疑問は、Amieの弟は何故怪我をし、その怪我と彼女はどんなかわりがあったのか、Shawがピクニックで黒人と一体何故喧嘩をして刺さねばならなかったのか、というような事件の経緯に関する疑問である。即ち、主人公達が経験した出来事の描写が不十分であるように思われる。しかしオーツ自身は、読者の目を主人公達の現在にむけさせるために、過去の出来事それ自体を重要視していないのではないかとと思われる。このように出来事が不明確な作品はオーツの短篇にはしばしばみられる。出来事の詳細を不明瞭にしておく最大の理由は、オーツが読者に「想像力を持った参加者」(imaginary participant)<sup>10)</sup>になることを期待するからであろう。しかしこの方法の短所も指摘されている。“The danger inherent in this technique is obvious. Concrete events become so hazy that instead of being creatively involved in the tale the reader loses the narrative thread.”<sup>11)</sup>確かに読者を当惑させる懸念はあるが、この技法は1つの状況に焦点を合わせる短篇小説としてはある程度やむを得ないものと考えられる。

同じく若者達の暴力を扱った作品は“Boys at a Picnic”と“An Encounter with the Blind”である。“Boys at a Picnic”では、3人の15歳前後の少年の残忍なviolenceがテーマとなっている。彼らはcountry peopleが遊びに来ているピクニック場に車で出掛け、そこで見つけた少女のあとを追ひ教会に入っていく。そこで少年の1人Rafeは彼女をつきとばし、彼女は教会の椅子に頭をぶつけ財布をとられる。少年達は奪ったお金でビールを飲み、再びハイウェイを目的もなく車を走らせる。少女を襲った少年Rafeが、物語の最後の部分で、車窓から外の風景を眺めている様子が次のように描かれている。“He wagged his fist at the rushing countryside, the dark, anonymous hills, the wasteland and cried in rage and wonder; ‘I’m going to die!’”(p. 91)少年達の行為は思慮分別のない若者の衝動的なviolenceであったが、“I am going to die.”というRafeの叫びは、Swanの場合と同様彼らの精神的な苦悩の始まりを告げるものである。

今までみてきた作品では、登場人物は男性が多かったが、“Pastoral Love”の中では、若く裕福な家庭の娘が主人公である。主人公Graceは間もなく結婚することになっているが、銀行の自分の預金を全て引き出し、店で新しい洋服を買い、それを着て誰にも告げずに一人でドライブに出掛ける。途中ヒッチハイカーを車に乗せたり、安っぽいレストランやバーに入ったりする。彼女は“The Expense of Spirit”の主人公と同様、自分の人生に倦怠感を覚え、何の不自由もない家为目的も特別の考えもなく出ただけであった。物語の最後で、彼女は自動車事故をひき起こし、病院に入っている。母親やフィアンセにやさしく見まもられて、やがて家に帰ることになるだろう。その最後の部分は次のようになっている。

Time can be nursed, there is all the time in the world; give her time to be freed, time to arrange for another escape, another flight. An hour after regaining consciousness Grace had rejected, flatly, the ease of insanity—bloodless suicide, suicide for cowards .... All the time in the world, and the next time there will be no failure. In another

year, perhaps. Experience is the best teacher. (pp. 112—113)

Grace は、Eden の園のような暖かい家庭に一度は戻るが、何の目的もなく過ごすことの倦怠感に耐えられなくなり、間もなく再び家出することであろう。彼女にとって家庭は安全な安らぎの場でもあるが、オーツの短篇の他の若者達と同様に、彼女はそこから real world へ出て行かねばならない衝動感を感じている。read world には危険や violence があるが、たとえ失敗しても彼らは自由を求めて家を出て行く。そういう自由を求めるアメリカ人の経験を、オーツは意識的に探究しているように思われる。

以上この短篇集の中で主題として共通している短篇のいくつかをみて来た。 *By the North Gate* では、物語の舞台は Eden County を中心に農村地帯や小さな地方都市であり、そこに登場する人物は、最初は純真な少年で、次に判断力もつきしかもあらゆる可能性を持った若者であり、次第に人生に倦怠感を持ち始める中年の男女へと移って行く。

このような登場人物と背景とが結び付いてテーマを形成しているが、Eden County という土地とその土地の人々の関係は、自然の猛威と卑小な人間という自然対人間の対立というのではない。Eden County の中での登場人物達の温和で素朴な人間の交わりの中に、残忍な殺人事件や事故死のような種々の violence が侵入し、人々を脅かす。舞台が自然の中の静かな農村であるだけに一層不気味さと恐怖感を与えている。しかも種々の violence は、自然の静寂と暗黒の中に吸収されて行くが、その後人々の生活を変える不思議な影 (Mysterious Shadows) <sup>12)</sup> が描かれている。

オーツはテーマとして「家庭の絆」(family ties) というものに重点を置いている。家族には家庭があるが、家族の誰かが家庭の絆を断ち、自由を求めて家庭を出て行き、個人の新たな歴史を作る。そしてオーツの小説ではそのような「個人も又、文化と歴史の全体図の中でみられている」(…the individual is always viewed in the perspective of culture and history.) <sup>13)</sup> のである。更にオーツ自身“All the books published under my name in the past 10 years have been formalized, complex propositions about the name of personality and its relationship to a specific culture (contemporary America).” <sup>14)</sup> と述べているように、彼女の作品の根底にある現実感、アメリカの現代文化という文化的背景の中で、人間性とのかわりに於いて追求されている。特にこの短篇集では、登場人物と Eden County という背景がうまく結び付き、人物像が鮮明になり、現実感をもたらしている優れた作品が多いと思われる。短篇の名手といわれるにふさわしいスタートである。

## Notes

- 1) Greighton, J. V. : *Joyce Carol Oates*, Preface, Twayne Publishers (1979)
- 2) Waller, G. F. : *Dreaming America ; Obsession and Transcendence in the Fiction of Joyce Carol Oates*, 3, Louisiana University Press (1979)
- 3) *Loc. cit.*                      4) *Ibid.* , 8
- 5) Friedman, Ellen G. : *Joyce Carol Oates*, 18, Frederic Ungar Publishing Co. (1980)
- 6) Oates, J. C. : *By the North Gate*, 28, Vanguard Press (1963) 以下オーツからの引用のうち、引用箇所のあとに括弧に入れて示した数字はすべて、この書物のページを示す。
- 7) Friedman, E. G. : *op. cit.* , 19                      8) Greighton, J. V. : *op. cit.* , 28    9) *Ibid.* , 29
- 10) Pickering, S. F. Jr : The Short Stories of Joyce Carol Oates, “*Georgia Review*”, 28, 220 (1974)
- 11) *Loc. cit.*                      12) *Ibid.* , 219
- 13) Friedman, E. G. : *pp. cit.* , 3
- 14) Oates, J. C. : “The Myth of the Isolated Artist”, “*Psychology Today*”, 75 (1972)